

回遊魚



回 遊 魚

杉 森 久 英

© Printed in Japan, 1963

回遊魚

昭和三十八年九月六日印刷
昭和三十八年九月十日發行

定価四〇〇円

著者 杉森久英

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
東京 〇四 七二 〇 振替東京 〇〇〇

印刷 塚田印刷株式会社
製本 新宿加藤製本所

△落丁本はお取替えいたします△

回
遊
魚

からのトラックが一台、甲州街道を西へ走っている。

二トン積みくらいの中型トラックで、あまり新品でもないといえて、灰青色に塗った車体や荷台が一体に薄よこれているが、乗り手は新米らしく、誰の目にもヨタヨタした、あぶなっかしい運転ぶりである。

こわくてスピードが出せないとみえて、ノロノロ走るものだから、あとから来た車にどんどん抜かれてゆく。

荷台のうしろに、白墨の下手な字で何か書いてある。よく見ると

「免許取りたて。よろしく」

と読める。乗用車ではちよいちよい見かけることだが、トラックに書いてあるのは、あまりない。

「見ろよ、あのヘタクソな運転を。おれたちも、はじめはああだったな……」

笑いながら追い越してゆく車もあるが、中には気短かにどなりつけてゆくやつもある。

笹塚あたりの交差点で、信号が黄になった。新米運転手がホッと一息して、額にじむ汗をぬぐっていると、隣にとまった同じような大きさのトラックから、年配の男が「免許取りたてと、わざわざことわらなくなったって、おめえが新米だってことは、その運転ぶりを見りゃあ、すぐわかるよ」

「そうでしょうか……でも、一応ことわるのが礼儀だと思いまして……」

骨組みのガッシリした、縦も横もヌツと大きい男だけれど、声音や言葉つきに、世馴れない若さを感じられる。

「礼儀って言う段になりゃあ、白墨であんな文句を書いとかより、一日も早く人並みの運転をして、ほかの車に迷惑をかけないのが礼儀ってもんだよ」

ずけずけ言うけれど、目は笑っている。若者は恐縮して、また新しく吹きだして来た額の汗をハンケチでふいている。すっかり上気して、まぶたのあたりがピクピク痙攣しているのは、おりから西に傾きかけた春の午後の太陽を、まともに受けているためばかりでもないらしい。

「いつ免許を取ったんだね」

「先月です」

「それじゃ、ほんとのホヤホヤだ……おめえ、ナンバーは神奈川だね」

「ええ、東京へ乗ってくるのは、はじめてです。すっかり

神経使いました」

また、まぶたをビクビクやる。

「第一、そんなにノロノロ走ってちゃあ、時間がかかってしようがないだろうに……ソラ、青になったよ、早く走り出さねえと、うしろの車にどやされるぞ」

言い捨てて、勢いよく飛び出していった。

ぼんやりしていて、一台だけ取り残されたことに気づいた若者があわててアクセルを踏んだので、車は猛烈なスピードで走り出した。

青いトラックは、代田橋から左へ折れると、世田谷一帯の住宅地の中へ迷いこんだ。

このあたりは、むかしは東京の西郊と呼ばれたところで、一面の大根畑やキャベツ畑の間に、茅ぶきの農家が点々と散らばっているきりだったが、大正大震災のあとの急激な都市の膨張と、私鉄の発達につれて、赤い屋根や青い屋根の、いわゆる文化住宅がポツポツ建ちはじめ、さらに戦中から戦後へかけての住宅難にあおられ、みるみる発展して今日のような市街地になったのである。

しかし、発展はどの面でも一様に行なわれたのではない。私鉄の駅の付近や、それらを結ぶ幹線道路に沿ったあたりには、商店や住宅がたてこんでいても、一步裏通りへ入ると、まだ畑地がたくさん残っていて、法被に股引きという、むかしながらのいでたちの農夫が、のんびり働いている姿

が、ちらほら見受けられる。

もっとも、この人たちが、時代の進歩に取り残されて、やむを得ずこんなことをしているのだとも思ったら、大きな間違いであろう。彼等はいま、先祖代々このあたりに土着した百姓だが、戦後の土地の値上りのため、莫大な財産の持ち主となり、あくせく働く必要がないため、遊び半分に畑作りをしているにすぎないのである。そしてまた、彼らの生活に余裕があつて、いそいで土地を手ばなす必要を感じないことが、土地不足にますます拍車をかけることになり、彼らの所有地の貨幣価値は、寝ている間もどんどん上ってゆくばかりである。彼らは、見たところバツとしないけれど、キッチンとしたかつこうをしてそこいらを歩き回っているサラリーマン連中より、百倍も千倍も財産家なのである。

こうして世田谷界隈は、日本じゅうのあらゆる都市の近郊と同様、住宅地と耕地とがだんだんにいりまじった、奇妙な縞目を織り成しているのだが、もともとこのあたりの番地は、明治のむかし、見渡すかぎり田圃と畑だったところ、土地所有の分布にしたがって大まかにつけられたものだから、今日の市街地の実際にはまるで合わないものになっている。

「代田二丁目の千——番地」

免許取りたての若者は、青いトラックをあちこちの堺や

電柱にこすりついたり、自転車やオートバイを何度かはね飛ばしそうになったりしながら、千——番地をさがしてあるのだが、なかなか目ざすところへ出て来ないのである。

道が二股になっているところに、小さな堂があり、そこに立っている赤いよだれ掛けの地藏様の、柔和忍辱の微笑にたしかに見おぼえがあつて、さつき通つたと同じ道へまた出て来たのだと気がついたとき、若者はフーッと大きなため息をついて、道ばたへ車をとめてしまった。

「千——番地はどのへんですか」

若者はトラックを停めたまま、運転台から身を乗り出して、通る人ごとに聞くけれど、なかなか知っている者がなくて、みんな無愛想に通り過ぎる。

何人めかにやつと、買物籠をさげた奥さんが

「あたしんところがそうよ」

といった。

「浅原さんといううちを探してるんですが」

運転台の若者にいわれて、奥さんは

「さあねえ……千——番地だけで二、三十軒あるのよ……何してるおうち？」

「大学の先生です」

「文化人ね。だったら、いつもベレーをかぶって、気むずかしそうな顔してそこいらを散歩している、あの人じゃないかしら……それだったらね……」

教えられた通りに、角を二、三度曲ると、せまい路地の奥に、檜葉の垣根をめぐらした平家建てがあつて、粗末な木の門に

浅原民雄

と書いた古びた標札が打ちつけてある。

路地の入り口でトラックをおりて、標札の下の呼びりんを押すと、建てつけの悪い玄関の戸をガタビシいわせながら出て来たのは、主人の浅原自身である。

小柄な四十男の浅原先生は、門の外に仁王立ちに立っている若い大男の、日焼けした顔にボサボサ垂れている、油気のない髪や、薄よごれた茶色の皮ジャンパーや、くしゃくしゃの作業ズボンを、ウサン臭そうに見上げたり見おろしたりしながら、

「何御用？」

と、言葉だけは一応丁寧に聞いた。

「僕、四年生の基国ですけれど……」

「四年生？　どこの四年だね」

言葉使いが急に横柄になったのは、なあんだ、学生か、はじめからそれとわかっていたら、丁寧な口をきくんじゃなかった、という気持ちらしい。

「文学部の四年です」

「文学部はわかつてる。どこの大学かと聞いてるんだ」
察するところ、浅原先生は方々の大学を掛け持ちしてい

るので、ただ文学部というだけではわからないらしい。

「M大学です」

「M大の四年か……あまり教室で顔を見たことがないようだね」

「ハア、先生の講義、聞くことになってるんですけれど、なかなか出られませんので……」

「基国君といったね。働いているんだね」

浅原は路地の入り口にとめてある青いトラックと、基国のよごれたジャンパーを見くらべながら、ちよつと同情するような顔をした。基国は訴えるような口調で

「仕事に追われて、なかなか出席できないんです」

「漁師のアルバイトかね、君は」

トラックの横っ腹に大きく『小柳漁場』と書いてあるのを、見て取ったらしい。

「そうです」

「どこでやってるの？」

「返子のさきです。今日は築地の市場へ荷を運んだ帰りで」

「それは御苦労さま。まあ、ちよつと上つてお茶でも飲んでゆきたまえ、せつかく来たんだから……」

浅原は、玄関の取っつきの狭い洋風の応接間へ基国を通すと、バネのすこしいたみかけた古物のソファにすわらせて、自分はその向うの小さな椅子にかけた。応接間といっ

ても、書齋の用も兼ねているらしく、四辺の壁に作りつけられた書棚は本で埋められ、はみ出した分は床に積みかさねてある。

「用事は何だね……もつとも、三月はじめに訪ねてくる学生の用事は、聞かなくても、大体見当はついているが……」

浅原はニコリともしないで、タバコに火をつける。基国は大きな肩をすくめて

「ハア……単位のことですが……」

「君は、落第点をとったのかね？　どの講義だい？」

「『写実主義総論』ですけれど」

「ああ、水曜の午後のだね？　あれは、全然できない答案が十ばかりあったから、点をあげられなかった。君もその一人だったのか……」

「きのう教務課へ問合わせてみましたら、受かっていないというので、困っちゃいます……」

「そりゃ困るだろう」

「卒業できないのです」

「あれ一つ受かっていれば、卒業できるというのかね」

「はあ、単位が一つだけ足りないのです」

「こんなことがあるから、単位はすこしよけいに取っておくものなのだ。たった一課目のことで、もう一年いなければならぬ」

基国はおどおどしながら

「なんとかして頂けないでしょうか」

「なんとかって？」

「卒業できるように……」

「つまり、及第点をくれろというのだね」

「そうです」

「だめだね」

浅原は冷然と言った。

「僕は、君の答案に何を書いてあったか、まるで覚えていないが、ともかく僕が落第点をつけた十人ばかりは、どうにもこうにも、しょうのない出来だったと思うよ。たしか、樋口一葉は二葉亭四迷の女弟子で、二人はひそかに恋しあっていた——なんてことを書いたのがあったが、あれは君じゃなかったらうね」

「実は……」

基国が首をすくめた。浅原はニガニガしげに

「やっぱ、君だったのか。君がユーモアの才に富んでいるらしいことは認めてもいいが、M大学の日本文学科の課程を完全に修得したというには、いささか足りない所があるようだ」

「やっぱ、だめでしょうか」

「君は僕を、冷酷無情な男だといって、恨むかもしれない。恨まれたって、しかたがない。しかし、本当は僕は無情な男でもなければ、冷酷な男でもない。僕は君が、働きな

ら学校へ通わねばならないということには、充分の同情を抱いているつもりだ。しかし僕は、出来のわるい答案にいい点をあげる権利がないのだ。わかるかね、君？ 出来のわるい答案には、涙をふるって落第点をつけるのが、M大学教授としての僕の神聖なる職務なのだ。これが現代における秩序というものだよ、君」

「どうしてもだめでしょうか」

基国はションボリ言ったが、それはもう、ほとんど駄目だと思いつながら、なお最後に、もう一度だけ頼んでみるのだというように聞こえた。

「気の毒だけれど、だめだね」

浅原はそういつたきり、黙ってタバコをふかしている。それはいかにも、用がすんだらさっさと帰れといわんばかりの態度なので、基国はしおしおと席を立とうとした。

その時玄関に誰か来た気配がした。

「いま、家内も子供も出かけてるもんだからね……」

ことわりを言いながら、浅原は自分で玄関へ立とうとした。そのうしろから、

「先生、僕、もう帰ります」

言いかけた時は、浅原はもう部屋を出ていた。

来訪者は若い女性らしい。なにしろ玄関は応接間とドア一枚で隔たっているきりなので、しゃべっていることが、手に取るように聞こえる。

「なんだ、ネコちゃんか……まあ、上ったらいいだろう。だけど、今日はキヨはいないよ」

「あら どちらへ？」

「お茶の稽古日だ」

「ずいぶん熱心なのねえ、おば様ったら……」

「僕がポツクリなくなっても、M大からもらう金は知れてるし、貯金もないから、お茶の先生でもやって、自活するつもりでいる。それで一生懸命なのさ」

「それだけじゃないわ、きつと。やっぱり、本当におすきなのよ」

「そうかも知れないね。万一の時の用意という理由だと、僕も反対できないからなあ……いずれにしろ、金曜日は、僕が留守番だ」

「アキちゃんたちは？」

「まだ学校」

「あたし、帰ろうかしら」

「よかつたら、上って待ってるといい。その中だれか帰ってくるだろう……僕もちょうど、仕事が一区切りついて、紅茶でもいいよかと思っていたところだ、使い立てて悪いけれど、君がいれてくれるとありがたい」

「女性の顔さえみれば、お茶をいれさせたがるのは、封建的男性よ」

「僕は今さらこの年になって、心を入れ替えて、前進的

性に気に入られようとも思わないが……そうだ、銀座のなんとかいう店のババロアがあるよ。これなら気に入るだろう。これでもいいやか……」

「ババロアと聞いちゃ、こてえられねえ……」

わざと下品に太い声で言って

「……だけど、お客さまじゃなくって？……その大きな靴」「お客さんにはちがいないけど、M大の学生だよ。かまわないんだ。その学生にも、ついでに紅茶をごちそうしてやってくれたまえ」

ドアのこちらで、基国はゴクリとつばを飲みこんだ。

台所の見当で、水の音や、食器などの触れ合う音が、しばらくしていたが、やがて静かになると、スラリと背の高い娘が、銀の盆に紅茶のセットをのせて現われた。

娘は足にピッタリくつつくほど細い、焦げ茶のスラックスをはき、グレイの男物のセーターを無造作に着ている。近ごろは、男が真赤なワイシャツを着、女はくすんだ男物を着るのが、最高のおしゃれらしい。

「どうぞ」

娘は器用な手つきで、紅茶の茶碗を基国の前に置いてから

「おじ様、ババロアはどこ？」

「茶の間の棚の上あたりだろう」

「取ってくるわね」

身をひるがえして出ていったが、身体のこなしがいかに
も軽くて敏捷で、あとにすがすがしい余韻のようなものが
残った。

「今日はゆっくりして、晩御飯を食べてゆくんだろう、ネ
コちゃん？」

銀座の有名なフランス人の店で作っている菓子や、箱か
らじかに指でつまんで、基国にもすすめながら、浅原は聞
いた。

「そうしてもいられないわ。学校へ行かなきゃならない
の」

「学校と……ハテネ、君はどんな学校へ行ってるんだった
かね」

「いやだわ、おじ様。こないだお話ししたじゃないの……
日本バレエ学院よ」

「ああ、あれ、学校なのか。僕はまた、バレエ団かと思っ
た」

「団は団で、これまで通り、杉谷バレエ団の団員よ。その
ほかに、新らしくできたバレエ学校へかよってるの」

「どうしてそんな、二重の手間のようなことをしなきゃな
らないんだい」

「おじ様に話してもわからないでしょうけれど、要するに、
ソ連から一流のバレリーナに来ていたでいて、基本からみ
っちり教わってるのよ。いま本格的な勉強をしようという

人たちは、みなかよってるわ」

「君もいよいよ本格的にバレエをやろうというのか」

「そういうことになりそうね」

「パパは何といってるかね」

「パパには言っていないの。どうせいけないといわれるにき
まつてるもの……」

「聞いたら怒るだろうね」

「あたしが杉谷で踊ってるというだけで、すでに充分怒っ
てるから、これ以上怒りようがないくらいだけれど、無用
なことで刺戟したくないわ」

「君も強情な娘だ」

「パパのわからず屋にも、困ったものだと思うわ」

「あいつは昔から、いったん言いだしたらあとへ引かない
男だったが、このごろ、ますますひどくなつたようだ」

「うちでもパパが、おじ様のことを、そんなふうに言っ
てるわ」

「あいつにそんなことを言う資格はない」

浅原がほんとに怒つたらしいので、娘は基国の方をチラ
リと見て、首をすくめて笑った。基国はひきずられておあ
いそに笑った。

やがて

「僕、失礼します」

基国は立ち上った。浅原と娘の会話が、彼を除外して、

二人の間だけで進行するので、気づまりになって来たらしい。

「それじゃ失敬……君には気の毒だけれど、さっきの話、きいてあげられないよ。まあ、もう一年勉強するんだね。すべて勉強するってことは、悪いことじゃない」

浅原が言うのを、娘がそばから

「なんのお話？ もしあたしが口を出していいなら……」

「僕が先生の試験に落第点を取って、今年卒業できないから、なんとかしていただけないかと、お願いに来たんです」
「そんなこったろうと思った。そしてあなたは、冷たく拒否されたというわけね」

浅原はムッとしたふうで

「冷たく拒否したというけれど、彼は取り得るものを取らなかつただけで、僕は与える権限がないというだけのことだ」

娘は口をゆがめて

「この男の言いそうなセリフよ——なんて老獪な論理——」

「この男……この男というのは、僕のことかね」

「ほかに考えようがあるかしら」

「若い娘が、長上をさして呼ぶ言葉としては、その言葉はあまり適当なものでないように思うが……」

「現代の感覚では、これでいいのよ。いすれにしろ、おじ

様って、すごく冷たいのね。あたしのパパとおなじ……」

「君のパパはわからずやだ。頭が固くて、物の道理が飲みこめないのだ。僕のほうはわかっている……わかっているから、無茶な要求に応じられないのだ」

「あたしには、同じようにしかみえないけれど」

「それこそ、よくわかっていない証拠だ」

いったん立ち上って、うやむやのうちにまた腰を下した基国は、会話が再び浅原と娘との間だけで進行しはじめたので、もう一度立ち上った。娘も立って

「あたしも帰るわ」

「学校があるんなら、ゆっくりしていけといつたって無理だな。もうじきキヨが帰ってくるだろうけれど……」

「いいわ……また今度……」

「何か用があつたんじゃないのか」

「ええ、ちょっと……だけど、いいんです。また出かけますから」

「僕でわかることなら……」

「いいの。ほんとにいいの」

娘はどこか強情な横顔を見せて、ドアの外へ出た。基国が続いた。

娘は、日本人としては背が高いほうだが、基国のそばへゆくと、肩までくらしいかない。玄関に並んで立った二人を、浅原は上から見おろしながら、

「バレエの学校はどこにあるの」

「五反田よ」

「基国君もそっちの方を通るのじゃないか——それともすこし回り道かな。すこしくらい回り道でも、車で送ってもらうといい」

「クルマ？」

「トラックです。きたないですよ」

基国がはにかんで答えた。

トラックはたしかに、あまりきれいではなかった。そこいらが薄よごれていて、ブンと魚の匂いがした。

しかし、それよりも問題は、基国の運転者としての技術にあった。彼は極度に用心深く、のろのろと運転するので、たとえ何かにぶつつけても、大した事故になるはずはなかったが、それでも、しょっちゅう何かにぶつかりそうだということは、あまりいい気持ちのものではない。

それに、基国が緊張して、というより逆上して、目を血走らせ、歯を食いしばってハンドルにしがみついている姿のほうが、娘を不安におとし入れた。たとえヘタクソであっても、自信ありげに運転してくれたほうが、ありがたい。

「大丈夫？ あなたの腕前……」

彼女は、聞いたってしようがないと思いながら、聞かずにいられたかった、

「わかりません。なにしろ、今日はじめて東京まで運転し

て来たのですから」

「まあ、はじめて……」

「でも、村ではしょっちゅう、乗っていますすけれど」

「あたしは今日は、お魚のかわりなのね」

「まあ、そんなところですよ……あんたは浅原先生の親戚ですか」

「いいえ、赤の他人よ」

「でも、おじ様と呼んでましたね」

「あたしの父と浅原さんが、学生の時からの親友で、いまでも兄弟みたいにしてるから、あたしも自分のうちみたいにしてるの」

「お父さんもやつぱり、M大の先生？」

「いえ、会社員よ。あたしはその娘で、関口ミネ子——よろしく」

「ネコちゃんともいうんですね？」

「みんなそう呼ぶわ」

「僕は基国周次郎……漁師です」

「働きながら大学へかよってるのね。大変でしょう」

「どうしても、勉強に集中できませんね。だいぶ先生にとちめられました」

「浅原のおじ様って、つまらないことに大げさな理屈をつけて、若い人をいじめるのが趣味なのよ。ふだんはとてもしいい人なんだけれど、ときどきどうかすると、急に気難か

しくなつて、手がつけられないの」

「でも、あんたと浅原先生との話を、そばで聞いていると、ずいぶんひどい事を言い合っていないながら、心の中では、お互いにそれほど腹を立てていないという感じですね」

「そうじゃないわ。あたし、おじ様と議論してるときは、全身がぶるぶるふるふるほど腹が立つて、引つ掻いてやるうか、噛みついてやるうかと思うくらいよ。それで、そのときはブンブンしながら別れるのだけれど、しばらくすると忘れちゃつて、なんとなくなつかしくなるの」

「ふうむ。そんなもんかねえ」

基国の言葉づかいが、いくらかゾンザイになつてきた。

東横線の中目黒に近いガードをくぐりながら、基国周次郎はふと思いついたように

「君は魚が好き？」

「好きって、食べることに？」

「そう」

「特別好きってこともないけれど、そう嫌いでもない……ただ、骨があつて、うるさいわね。お肉は骨がないから好き」

「けさの網で取れたばかりの、新しいのがあるけど、あげようか」

「そんな新しいの、食べたことがないわ。どんなお魚？」

「タイに、ワカシに、ホウボウ」

「タイは知ってるけど、ワカシだのホウボウだなんて、聞いたこともないわ」

「ワカシはブリの子き。ブリって奴は、成長するにつれて名前が変わるんだ。五、六寸の子供のうちはワカシといつて、すこし大きくなると、イナダといったりハマチといったりする。もつと大きくなるとワラサと名が變つて、完全に成長してはじめて、ブリというんだ」

「ずいぶんややこしいのね。ブリならよく知ってるわ。ワラサも聞いたことあるけど、ワカシなんて、はじめて」

「まだ小さいから、脂肪が乗ってないけれど、サッパリして、おいしい魚だよ」

「パパがきつと喜ぶわ……パパったら、魚には目がなくて、自分で猫族と称しているくらいだから」

「君のお父さんは、どこか海の近くででも生まれたのかい」
「若狭湾の沿岸の、小さな村の生まれよ。だから、魚のシユンだとかシユンでないとか、古いの新らしいのつてことにやかましくて、うるさくてしょうがないの。御飯のおかずにお魚が出たりすると、きれいに隅々までほじくつて、あたしたちがいい加減な食べ方をすると、もったいないって怒るわ」

「それは、僕たちもそうだな。魚というものは、背中だけでなくて、方々においしいところがいっぱい隠れているものだよ。それをほじくり出して食べなくては、意味がない」

「ああなると、むしろ精密手工業とでもいいいくらいね。目の玉の下、人間でいえばほったあたりの肉をほじくり出したり、ボンノクボに当るところから、少しばかりの身をひっぱり出したり、顎や喉や、ミソオチみたいところをバラバラに分解して、骨を一本ずつせり出しちゃあ、丹念にしゃぶってるんだもの」

「それこそ、本当の漁師の食べ方だ」

「あたしはケチなんじゃないかと思うわ。だってババったら、日常生活のほかの点でも、万事そういう風なんだもの」
「ほかの事は知らないが、魚の食べ方に關しては、僕は君のババの方を支持するな。大体、東京の人たちは魚の食べ方を知らないよ。魚ってものは、背中だけ食べるものだと思ってる」

「だって、おなかのあたりなんか、嫌な匂いがするじゃない？」

「それは古くなってるからだよ。新しい魚はけっしてそんな匂いはいない」

基国周次郎は、はじめのうちのおずおずした調子とうって変ってひどく能弁になっていた。

「ほんとういうとね、この魚……」

基国は運転台の足もとに置いてある、七、八寸角の段ボールの箱を、片足で軽く蹴りながらいった。問題の魚はこの箱の中に入っているらしい。

「これは浅原先生に上げるつもりで持って来たんだけれど、やめることにした」

「単位をくれなかったから？」

「単位をくれないから上げないというわけじゃないけれど、くれないのに上げるのは、わざとらしくて皮肉なやり方のような気がしたのさ」

「浅原のおじ様は、うちのババに負けないくらい、お魚が好きなのよ。聞いたら、くやしがるかもしれないわ」

「といって、今から引返して、上げにゆくわけにもゆかないし……」

「最初にやっちゃえば、よかったのよ。そうすれば、単位くれたかもしれないのに……」

「それも考えたけれど、それじゃ、まるで単位を買いにゆくみたいで、気が進まなかった。それに、先生の考え方は、落第点は答案の出来が悪い以上やむを得ないことで、情実ではどうすることもできないという、清潔な精神に貫かれているようだ。はじめにこんな物を出したら、きびしく拒否されたにちがいない」

ミネ子は笑って

「そんなことあるんですか。ホクホク喜んで、二つ返事で単位をくれたに相違ないわよ。あのもっともらしい理屈は、自分の不機嫌にあとからくつつけたものに過ぎないのよ、御機嫌がよければ、べつのもっと陽気な理屈がつくだ

けの話よ」

「そういうものだろうか」

「誰でもそういうものかどうか、知らないけど、浅原のおじ様がそういう人であることは、まちがいない。あたしは長年にわたって彼を研究し尽しているから、彼の性格は隅隅までよく知っている」

「だとすれば、僕は大変な失策をしたわけだ」

「それでつまり、このお魚が宙に浮いたというわけね。あたしはいい所へ来あわせたわけだわ。これ貰って帰って、オヤジを喜ばせてやろう」

「それで僕も、セイセイした」

「でも、ずいぶん高価な品ね——これ一箱で一単位もうかったはずなのだと思うと」

トラックはいつのまにか、五反田の駅の近くへ来ていた。

「学校はどこ？ 国電の内側？ 外側？」

「内側。都電の通りをすこし行ったところ」

すこし行つて右へ入ると、閑静な住宅地になって、その中の一軒、もとは個人の邸宅だったと思われるところに

日本バレエ学院

という看板がかかっている。その前でトラックを停めてもらったミネ子は、ふつうの自動車より高い運転台からヒラリと飛びおりと

「ありがと。おかげ様でいのち拾ひしたわ。それから、電

車賃助かったわ。それにお魚もたくさん……来月の十日に、あたしたちの公演があるんだけど、見に来てくれる？ 演し物は『オセロ』よ。これ切符」

切符と交換に段ボールの魚の箱を受け取ると、スタスタと門内へ消えた。

二

関口鶴之助ほど娘を溺愛している父親は、世間にも少くないであろう。しかしまた、彼ほど無残に娘にそむかれていた父親も、あまりないであろう。彼はしょっちゅう娘の機嫌をそこねはしないかと、戦々競々としてその顔をうかがっているのだが、晴れ晴れした微笑でむくいられることはめったにないのである。

なぜ娘がそんなに不機嫌なのか、彼にはどうしても理解できない。青春期に特有の気まぐれのせいであろうか、母親のいない家庭のさびしさのせいであろうか（彼の妻は、娘が中学へ入ったばかりのころ、なくなつた。それ以来彼は独身生活を続けている）、それとも学校なり友達の間なりで、何か気にいらぬことでもあるのかと、いろいろ想像をめぐらしてみる。しかし娘の不機嫌が、ほかならぬ自分